

胃部レントゲン検査

造影剤（バリウム）を飲んで、食道から胃、十二指腸までを X 線画像にする検査です。胃十二指腸のポリープ、潰瘍、がんなどが発見できます。

部位 1	部位 2	所見	所見説明
1. 食道	0. その他	1. 硬化	胃壁のやわらかさがなく、伸縮性が悪い状態
2. 噴門	1. 前壁	2. 壁不整	壁・粘膜表面の乱れた状態
3. 胃体	2. 後壁	3. 欠損	バリウムの陰影が一部写っていない所見
4. 胃角	3. 小弯	4. ニッシェ	潰瘍等の窪んだ部分にバリウムが溜まった所見
5. 前庭	4. 大弯	5. レリーフ異常	粘膜のひだ（襞）の走行が異常な状態
6. 球部		6. 変形	正常像に比べ辺縁の形が変わっているもの
7. 穹窿部		7. 充満不良	十二指腸球部にバリウムが入らない状態
8. 幽門		8. バリウム抜け	胃壁の隆起物によってバリウムがはじかれた状態
9. 十二指腸		9. バリウム斑	粘膜の凹んだ部分にバリウムが溜まった所見
よく見られる所見	所見説明		
憩室	憩室は食道の壁、胃、十二指腸の壁が外に向かってふくれ出て小さな袋を作っている状態です。 これ自体が疾患というわけではありませんので、心配ありません。		
食道裂孔ヘルニア	食道が通る横隔膜の穴を食道裂孔といい、この穴から本来、腹腔内にあるべき胃の一部が胸腔内に脱出している状態。胸焼けの原因になることがあります。自覚症状がある場合は精密検査が必要です。		
潰瘍瘢痕	胃・十二指腸潰瘍の治った跡を瘢痕といいます。現在は治った状態ですからあまり心配することはありません。しかし、自覚症状があるようでしたら精密検査が必要です。		
巨大レリーフ	胃にある正常のヒダが慢性炎症等によって、太くなった状態です。これ自体が疾患というわけではありません。しかし、自覚症状があるようでしたら精密検査が必要です。		

ニッシュェ	粘膜の表面の陥凹した部分にバリウムが溜まった所見をニッシュェといいます。潰瘍ができると、その部分の粘膜にひきつれがおきるため、潰瘍に向かって粘膜が吸い寄せられるように集中し、これを粘膜集中像といいます。これらの所見は通常、内視鏡検査を必要とします。
びらん性胃炎	胃の粘膜に起きた炎症によって粘膜表面に損傷が見られる状態です。
慢性胃炎	胃粘膜が何らかの原因で持続的に炎症を起している状態です。表層性胃炎から萎縮性胃炎に至るいろいろな段階があります。
萎縮性胃炎	胃腺細胞の減少をもたらす胃粘膜の慢性炎症です。ピロリ菌感染が続いた後に見られることが多く、年1回以上の経過観察が必要です。
ポリープ (疑い)	胃粘膜が隆起して起こる病変です。ほとんどが良性です。「疑い」の場合は撮影時の気泡等の陰影の場合があります。
隆起性病変 (疑い)	腫瘍・ポリープなど胃・十二指腸等の粘膜表面が盛り上がった状態です。「疑い」の場合はひだやバリウムのむらによる陰影の場合があります。
粘膜下腫瘍	胃固有筋層の病変（粘膜の下に出来た腫瘍）により粘膜が内腔に隆起した状態です。
胃角部変形	通常はU字型をしている胃角部の辺縁が、直線化したり開大化した状態です。胃潰瘍・胃炎・がんの場合もありますので精密検査の指示があれば内視鏡検査を受けてください。
球部変形	十二指腸球部に潰瘍ができることで辺縁が変形している状態です。
食物残渣	胃の中に摂取した食べ物が残っている状態です。